

18-5 授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：社会

単元（教材）：「宇治茶が台湾で人気の理由を考えよう」

対象：小学校4年1組

授業者：大島彰央 先生

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○本授業は、附属桃山小学校の4年次の「社会」で行われた「古くから受けつがれてきた産業のさかんな宇治市」(全7時間)のうち第1時間目に相当する。京都府の産業(宇治茶)の特徴を地理・歴史的なことがらをふまえて理解し、伝統文化に対する誇りと愛情を育むテーマ学習の導入部である。文化(異文化)理解において重要なことの一つは、自文化の特徴を考える際、その内部だけで考えるのではなく、常に他者との比較の視座をもつことである。本授業では、児童にとって身近な飲料であるお茶(宇治茶)の特徴について考えさせる手段として、台湾で放送されている宇治茶のCMを利用することで、児童に自然なかたちでそれを実践させることに成功している。児童はCMをみて、台湾で宇治茶が人気な理由を考え、それを通じて宇治茶の特徴について仮説を出していき、日本と台湾のお茶の違い(味・品質・作り方など)への興味関心を高めていく。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○本授業で主たる素材とした茶は、鎌倉時代に最新の中国文化として主に禅僧によって日本に紹介され、やがて日本の伝統文化とみなされるようになったもので(禅宗自体、同様の性格をもつ)、また19世紀にはアヘンと引き替えに中国(清朝)からイギリスにもたらされ、イギリスの産業化を支えた工場労働者の飲料となるなど、グローバル・ヒストリーの典型的な素材である(橋本素子『中世の喫茶文化—儀礼の茶から「茶の湯」へ—』吉川弘文館、2018年。角山栄『改版・茶の世界史—緑茶の文化と紅茶の世界—』中央公論新社〈中央新書〉、2017年など)。本授業では、歴史を本格的に学んでいない児童を対象とするため、十分に触れられていないが(お茶の発祥は、後日の授業で扱われる)、児童・生徒の発達段階に応じて論点を示していくことで、グローバル化の歴史的展開や、グローバルな視座から日本文化を捉える学習につながっていくはずである。

○本授業は、いまだ外国文化を本格的に学んでない児童を対象とし、地域産業を扱うテーマ学習の導入部であったが、他国のCMを教材として活用することは、それにとどまらないポテンシャルを有している。たとえば、使用されている文字や言葉、景観や服装などを通じて他国・異文化に触れたり、反対に他国からみた日本のイメージを考える素材(宇治茶のCMはその典型)にも使用できる。なおCMの収集やその理解(言語の翻訳などを含

む) にあたっては、教室内に様々な国・地域にルーツをもつ児童・生徒がいる場合も昨今では少なくないため、彼／彼女ら（あるいはその保護者）の協力を得ることも必要になる場合があるかもしれない。